松山城の夜景

【松山城案内図】

〈交通アクセス〉

松山空港から	リムジンバスで約30分、「大街道」下車徒歩5分
松山観光港から	リムジンバスで約30分、「大街道」下車徒歩5分
JR松山駅から	「道後温泉行き」市内電車で約10分、「大街道」下車徒歩5分
松山市駅から	「道後温泉行き」「環状線大街道方面行き」市内電車で約6分、「大街道」下車徒歩5分

お問い合せ

松山市 松山城 関連施設 指定管理者

伊予鉄道株式会社 松山城総合事務所

〒790-0004 愛媛県松山市大街道3丁目2-46

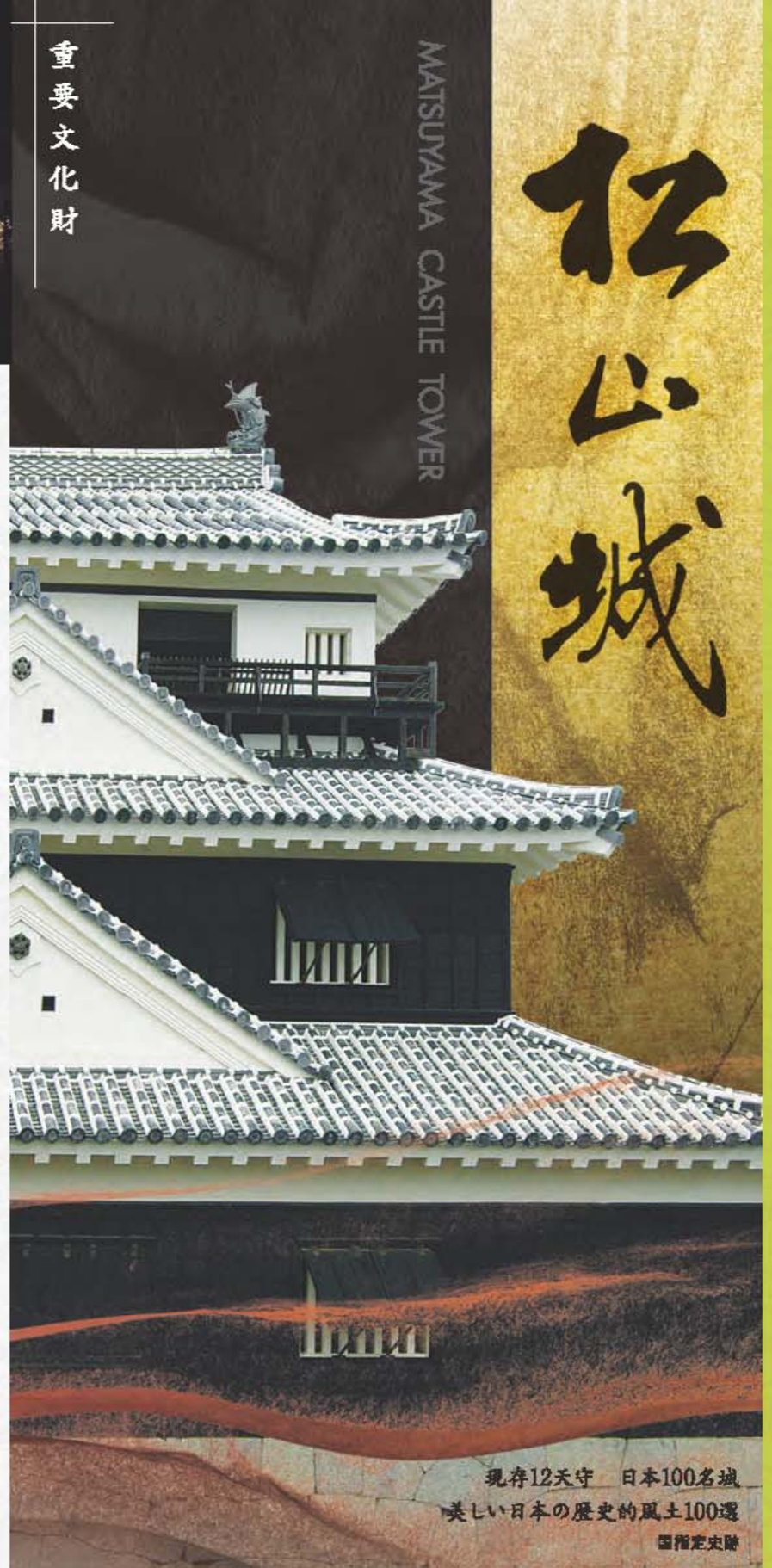
TEL 089-921-4873 http://www.matsuyamajo.jp

松山観光コンベンション協会 TEL 089-935-7511	JR松山駅観光案内所 TEL 089-931-3914
道後観光案内所 TEL 089-921-3708	松山市観光・国際交流課 TEL 089-948-6556~8

重要文化財

MATSUYAMA CASTLE TOWER

松山城



現存12天守　日本100名城

美しい日本の歴史的風土100選

国指定史跡

松山城 かわら版

松山城マスコットキャラクター　よしあきくん

“天丸”と“まつ姫”

天丸　まつ姫

「お城の住民票」を獲得！平成18年春に松山城のしゃちほこが81年ぶりに新しくなった。その愛称を募集したところ、全国から約5000通の応募があり、その中から「あ」のしゃちを『天丸』千葉県の石井さん、「うん」のしゃちを『まつ姫』東京、神奈川、千葉、愛媛、福岡の8人と決定。平成18年6月には市長から「お城の住民票」の交付を受けた。

松山城大天守の不思議

天守とは戦闘のときにこそ、その存在価値がある。防衛の要として一大事のときにだけ籠城。日ごろは城主やその側近らが足を踏み入れることもなく、生活の場ではないのでトイレも炊事場もない。床は板張りで天井板もないのが通例だ。ところが松山城は一重、二重、三重とも天井板があり、畳の敷ける構造になっている。さらには床の間もしつらえられ、襖を入れるための敷居まである。これは何を意味するのか。当時の城主、12代松平勝善はここを何の用途にしようとしたのか、定かではない。

江戸時代の落書きを展示

天守には、修復中に見つかった江戸時代の大工さんが描いたとみられる下見板を展示している。侍の似顔絵と思われる絵は上手！

■参考文献：「みんなのお城山松山城」(愛媛新聞社)、「日本の城の基礎知識」(雄山閣)
「復元名城天守」(学習研究社)、「黒潮寄せる南海の城」(毎日新聞社)

四国最大の名城
21棟の重要文化財をもつ
松山城

◎所　在　地：松山市丸之内
◎別　　名：勝山城、金亀城
◎重要文化財：21棟
　大天守、乾櫓、野原櫓、仕切門、紫竹門、隠門、戸無門、一ノ門ほか

1 大天守と 1 小天守

大天守は三重三階地下一階の層塔型天守で、黒船来航の翌年落成した江戸時代最後の完全な城郭建築。また、現存12天守の中で、唯一、築城主として瓦には「葵の御紋」が付されている。

小天守は、二重櫓、小天守東櫓とも呼ばれ、大手（正面）の二之丸・三之丸方面を監視防衛する重要な位置にある。大天守、小天守、隅櫓を渡櫓（わたりやぐら）で互いに結び、武備に徹したこの天守建造物群は、わが国の代表的な連立式天守を備えた城郭といわれている。

7 南隅櫓（やぐら）・27 十間廊下・12 北隅櫓（やぐら）

玄関に続く北隅櫓は小天守北ノ櫓とか戌亥小天守、南隅櫓は申酉小天守とも呼ばれ、大天守に次ぐ格式をもつ櫓である。十間廊下は天守の搦手（からめて）（裏手）にあたる西側の乾門方面を防衛する重要な櫓であって、北隅櫓と南隅櫓を連結する渡櫓（わたりやぐら）でもある。桁行が10間あることからこの名がある。

9 天神櫓（やぐら）

卯歳櫓、東隅櫓とも呼ばれ具足櫓であったが、後に本壇の鬼門（東北隅）にあたるため、城の安泰を祈り久松松平氏の祖先神である天神（菅原道真）を祭ったのでこの名がある。

10 筋鉄門（すじがね）

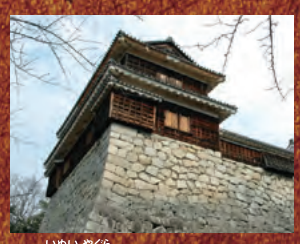
筋鉄門は櫓門で、天守玄関がある中庭を防衛する重要な門である。この門の櫓は小天守と大天守をつなぎ、三ノ門から侵入する敵の正面を射撃する構えとなっている。

10 一ノ門

一ノ門は天守に通じる本壇入口を守る門で、木割も大きく豪放な構えとなっている。形式は上方からの攻撃が容易な高麗門で、二ノ門との間は枡形という方形空間となっていて小天守・一ノ門南櫓・二ノ門南櫓・三ノ門南櫓の四方から攻撃できる。

11 紫竹門（しちく）

本壇に接して紫竹門および続塀がある。乾門方面からの侵入に対し、この門と東塀・西塀によって大きく仕切ることにより、本丸の搦手（裏）を防衛する重要な構えである。



5 乾櫓（いぬいやぐら）

乾櫓は築城当初の二重の隅櫓で、本丸の乾（北西）の隅の鈍角の石垣の上に鈍角の櫓が建っている。乾門・同東続櫓とともに搦手（裏側）を防衛する重要な構えである。

22 乾門（いぬい）・17 乾門東続櫓（いぬいやぐら）

この門、櫓は慶長年間正木（まさき）城から移建されたといわれ、乾一ノ門とともに、松山城の搦手（裏）の門の中で、最も重要な構えとなっている。

重要文化財

1 天守
2 三ノ門南櫓
3 二ノ門南櫓
4 一ノ門南櫓
5 乾櫓
6 野原櫓
7 仕切門
8 三ノ門
9 二ノ門
10 一ノ門
11 紫竹門
12 隠門
13 隠門続櫓
14 戸無門
15 仕切門内塀
16 三ノ門東塀
17 筋鉄門東塀
18 二ノ門東塀
19 一ノ門東塀
20 紫竹門東塀
21 紫竹門西塀

復興建造物

1 小天守
2 筒井門
3 太鼓櫓
4 天神櫓南塀
5 天神櫓西折曲塀
6 馬具櫓
7 南隅櫓
8 乾門西塀
9 天神櫓
10 筋鉄門
11 多聞櫓
12 北隅櫓
13 筒井門東続櫓
14 筒井門西続櫓
15 巽櫓
16 巽櫓西塀
17 乾門東続櫓
18 太鼓門
19 太鼓門南続櫓
20 太鼓門北続櫓
21 太鼓門西塀
22 乾門
23 乾門東続櫓東折曲塀
24 艮門
25 艮門東続櫓
26 井戸
27 十間廊下
28 玄関
29 玄関多聞
30 内門

歴代城主家紋

加藤家（蛇の目）
蒲生家（左三ツ巴）
松平家（三つ葉葵）
久松家（星梅鉢）

6 野原櫓（やぐら）

野原櫓は乾櫓とともに本丸西北を防備するとともに、その東にあった小筒櫓（跡）と本丸の北側を防衛する重要な櫓であり、日本で唯一現存する望楼型二重櫓で、天守の原型といわれている。

26 井戸

南北2つの峰を埋め立てて本丸の敷地を作った際、谷底にあった泉を井戸として残したといい伝えられる。井戸の直径2m深さ44.2mで当時の技術では、通常、掘ることができない深さがある。

24 艮門（うしとら）・25 艮門東続櫓（うしとらやぐら）

本壇の鬼門（北東）にあたり、不浄門ともいう。この方面の防備を担当すると共に、本丸防衛のための出撃口としての意味も持ち、敵が大手（正面）の揚木戸門に、あるいは、また搦手（裏側）の乾門方面に迫ったとき、この門から出撃して侵入者の側面を攻撃するためのものと考えられる。

18 太鼓門［左］・3 太鼓櫓（やぐら）［右］

太鼓門・同南北続櫓・太鼓櫓・巽櫓は1つの防御単位を構成し、高さ約5mの石垣に一線に構築され、筒井門から本丸南腰郭に侵入してくる敵に備えている。石垣の西端の太鼓櫓と太鼓門との間にある24.41mの渡塀には狭間21ヵ所、石落2ヵ所が設けられている。

12 隠門（かくれ）［左］・13 隠門続櫓（かくれやぐら）［上］

この門は筒井門の奥の石垣の陰に隠された、埋門（うずみもん）形式の櫓門で、戸無門から筒井門に迫る敵の背後を急襲する構えとなっている。脇戸を持たず、扉の横板張りの中に潜戸（くぐりど）を仕組むなど規模は小さいが、豪放な構えで、続櫓外部の下見板張りや、格子窓形式の突揚げ戸などとともに、築城当時の面影を見ることができる。

2 筒井門

この門は築城の際、正木城から移建されたと伝えられる松山城最大の門である。三之丸・二之丸から本丸へ向かう、大手（正面）の固めを構成する重要な櫓門で、城中で最も重要かつ堅固な所となっている。

14 戸無門（とな し）

この門は、本丸の大手入口の最初に現存する高麗門である。登城道U字屈折の終点に位置する。昔から門扉がないので戸無門と呼ばれ、鏡柱にも扉を取り付けた痕跡がない。

松山城の沿革

松山城は、海抜132mの勝山山頂に本丸、中腹に二之丸、山麓に三之丸(堀の内)を置く連郭式平山城で、敵の侵入を防ぐため、二之丸を取り囲むように山麓から本丸にかけて、全国的にもめずらしい「登り石垣」が配されている。

松山城の創設者は加藤嘉明である。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいて徳川家康側に従軍し、その戦功を認められて20万石となった嘉明は、同7年に伊予正木(愛媛県松前町)から道後平野の中央にある勝山に城郭を移すため、普請奉行に足立重信を命じて地割を行い工事に着手した。翌8年(1603)10月に嘉明は居を新城下に移し、初めて松山という名称が公にされた。

その後も工事は継続され、寛永4年(1627)になってようやく一応の完成をみた。当時の天守は五重で偉観を誇ったと伝えられる。しかし嘉明は松山にあること25年、完成直前の寛永4年(1627)2月に会津へ転封される。そのあとへ蒲生氏郷の孫忠知が出羽国(山形県)上の山城から入国し、二之丸の築造を完成したが、寛永11年8月参勤交代の途中、在城7年目に京都で病没し、嗣子がいないので断絶する。

その後、寛永12年(1635)7月伊勢国(三重県)桑名城主松平定行が伊予松山15万石に封じられた。寛永16年(1639)定行は、3年の年月をかけ、築城当時五重であった天守を三重に改築する。これは地盤の弱さに起因する天守の安全確保とも、江戸幕府に配慮したためともいわれている。

ところが、9代松平定国(8代将軍徳川吉宗の孫)の天明4年(1784)元旦、落雷で天守が焼失した。焼失後37年を経た文政3年(1820)、父定国の遺志を継いだ11代定通は、復興工事に着手するが、着工16年にして、定通の逝去と作事場の火災で頓挫する。これを引き継いだ12代藩主松平勝善は、弘化4年(1847)城郭復興に着手、ようやく安政元年(1854)悲願の天守が復興した。

これが現在の天守で、姫路城と並ぶ典型的な連立式天守をもち、慶長期の様式を引き継ぐ、わが国最後の完全な城郭建築といわれる。

松山城年表

西暦	城主名	居城年 治封(年齢)	摘要
1603	加藤 嘉明 (禄高20万石)	慶長 8 年 (25)	慶長6年築城許可、同7年(1602)着工し同8年正木城より移る。天守五重。寛永4年会津40万石に転封
1627	蒲生 忠知 (禄高24万石)	寛永 4 年 (7)	蒲生氏郷の孫、出羽上の山城より移封、二之丸完成 寛永11年逝去、嗣子なく断絶
1635	松平 定行 (禄高15万石)	寛永12年 (24)	寛永12年伊勢桑名より転封、徳川家康の異父同母弟松平定勝の子 寛永19年天守を三重に改築
1658	同 定頼	万治元年 (5)	
1662	同 定長	寛文 2 年 (13)	
1674	同 定直	延宝 2 年 (47)	今治藩主松平定時の子、延宝2年就封
1720	同 定英	享保 5 年 (14)	
1733	同 定喬	享保18年 (31)	
1763	同 定功	宝暦13年 (3)	
1765	同 定静	明和 2 年 (15)	
1779	同 定国	安永 8 年 (26)	天明4年(1784)天守落雷で焼失
1804	同 定則	文化元年 (6)	
1809	同 定通	文化 6 年 (27)	文政3年(1820)天守再建工事にかかる
1835	同 勝善	天保 6 年 (22)	安政元年(1854)天守再建なる(現存)
1856	同 勝成	安政 3 年 (13)	
1867	同 定昭	慶応 3 年 (1)	
1868	同 勝成 (再任)	明治 1 年 (2)	松平姓を返上し旧姓の久松となる
1869		明治 2 年	版籍奉還明治3年三之丸全焼、同5年二之丸焼失
1923		大正12年	久松定謨伯より城郭を寄贈され松山市の所有となる
1933		昭和 8 年	小天守、南北隅櫓、多聞櫓など放火のため焼失
1945		昭和20年	乾門など戦火のため焼失
1958		昭和33年	馬具櫓を鉄筋で復興
1968		昭和43年	小天守、南北隅櫓、多聞櫓、十間廊下などを木造で復興
1971		昭和46年	筒井門を木造で復興
1972		昭和47年	太鼓門を木造で復興
1973		昭和48年	太鼓櫓を木造で復興
1979		昭和54年	天神櫓を木造で復興
1982		昭和57年	乾門同東続櫓を木造で復興
1984		昭和59年	艮門同東続櫓を木造で復興
1986		昭和61年	巽櫓を木造で復興
1990		平成 2 年	太鼓門西塀を復興
2006		平成18年	天守など7棟保存修理工事完了